

絵画の中のはきもの

石膏の足型

見 一 眞理子

「今や靴も3Dプリンターで作った木型でフルオーダーを受ける時代がやってきた!!」と、製造現場からの中継映像がニュース番組で流れていました。お客様の足を瞬時に計測し、その画像データを基にデザインに応じた木型を作成することで短期間にご希望の靴をお届けできるということです。

職人にとって、複雑な足の形態を正確に把握して履き心地の良い靴を作りたいという意気込みは今も昔も変わりません。だいぶ前の話ですが、販売店から注文靴専門店へと新たな一步を踏み出した頃の父も、お客様の足にフィットする靴づくりを目指して試行錯誤を繰り返していました。

父が着目したのは、当時歯科医が菌型を取る際に使っていたモデリングペーストでした。お湯で温め柔らかくしたペーストをお客様の足の甲に乗せ、冷えて固まった型に石膏を流し込み足の特徴を捉えようと試みたのです。採寸と同時に行うこのパフォーマンスはお客様の期待感を徐々に高め、“あなただけの靴”というキャッチフレーズとともに評判になりました。

アートの世界でも常に新しい技術を取り入れて様々な挑戦が行われてきました。私の好きな17世紀のオランダの画家フェルメールも当時最先端のカメラ・オブスクラ（ピンホールカメラ）を使って下絵を描き、光溢れる美しい名画を遺しています。現在ではパソコンで作画したデータを大型

プリンターでキャンバス地に印刷した作品も増えており、私の所属している二紀会の意見交換会でも「3Dプリンターで作った彫刻は芸術として認められるのか？」という議論で盛り上がるなど、新しいアートに対する評価は追いつかない時代になっています。同時に普遍的な技法や手の仕事の大切さを改めて思う時代でもあると感じます。

父は晩年、趣味として彫塑や陶芸に熱心に取り組んでいました。きっかけはボランティアとして教会の陶芸教室のアシスタントを引き受けたことからでしたが、「石膏の足型」の経験からいつかオリジナル作品を作りたいという強いこだわりが父の中で燦っていたのかも知れません。

“ナルシスト”の父らしい作品が今も玄関に置かれています。それは父自身の等身大の胸像です。仕上げに靴墨を塗って黒光りした父に触れてみると、制作の痕跡が残っていて温もりが蘇ってきます。父はどんな言葉よりも自画像を遺すことで、自分の生き様を思い出してほしいと願っていたのではないのでしょうか。時代の流れを柔軟に取り入れながら自分の腕を信じて作り続けた父と同じく、私も体温を感じる“履き心地の良い”絵を描く「職人」でありたいと思っています。

「絵画の中のはきもの」は、今回で連載を終了いたします。ご愛読ありがとうございました。